

成果報告書

つるまち図書室

■本報告書の流れ

1. 補助金申請の目的
2. 活動内容
3. 活動成果の報告（わかったことや課題等）
4. 1～3 をふまえた都留市への提案書

■市民委員会制度補助金申請の目的

私たちは2015年9月より地域に開かれた図書室を運営してきました。当初、「自分たちが本に囲まれて生活する」ことを目的に創った場ではありますが、開室以来地域の方々や文大生などに利用してもらいながら、地域におけるコミュニティ拠点としての在り方について考えるようになりました。

図書室が役割として担えると考えた機能は以下の点です。

- ・文大生と地域の方々との相互交流の場となる
- ・文大生の活動が地域へ貢献できる活動を行う場（拠点）となる
- ・文大生が地域で活動する際のひとつの出口として図書室を利用する
- ・地域の方の要望に文大生として応えていく

これらの点について、図書室として実践することで、文大生が作るコミュニティの場を地域と文大生の両者のコミュニティの場にするための施策について都留市へ提言することを目的とし、補助金の申請に至りました。

■活動内容

1. 日常的な開室

図書室が拠点であるためには、まずイベントのような一過性のものではなく、日常的に運営されている必要があります。そのため、重要なのは地域の方や文大生が利用したいときに利用できる場であるように開かれていることだと考えます。平均週4～5日の開室を行います。

2. ワークショップの開催

図書室内で小規模なワークショップの開催を行います。普段あまり関わりあいのない文大生と地域の方が「都留のまち」という共通のテーマについて意見を交換し、お互いの認識や要望などを知ることができる場とします。

3. 地域活動への参加

地域で行われているイベントに参加します。「高尾神社例大祭蚤の市」へ出店は昨年度から行っている活動であり、本年度も継続して参加します。地域の方の要望に文大生として、対応できる事例として紹介します。

また都留文科大学地域社会学会の「まちあるき」において、図書室の活動紹介を行います。

4. 小説・漫画再現料理交流会

小説や漫画に出てくる料理を参加者が三町商店街で材料を揃え、図書室で再現してみようというものです。参加者は普段商店街へ出てくる機会の少ない文大生です。今回は図書室としての特性も活かし、文大の図書系サークルとの交流を図りました。商店街を利用したことがほとんどない文大生にも実際に商店街を歩き、利用してもらうことで商店街の方々と触れ合ってもらえる機会とします。

また図書室内でのサークルの活動を同時に行います。これは、文大生が地域で活動する際に、図書室をそのひとつの出口として利用してもらう取組です。今回は図書館サークル Libropass が「ビブリオバトル in つるまち図書室」を実施します。

5. 研修活動

図書室の参考とした西国分寺の「西国図書室」へ研修に行きます。地域で図書室を運営するうえでのポイントや注意、地域との関わり方について学ぶことが目的です。

また、飲食店と図書室が併設された渋谷区の「森の図書室(森の正式な表記は本が3つ)」の見学を行います。本を利用した空間づくり、仕組みづくりについて学ぶことが目的です。

1. 日常的な開室

通年の不定期開室で、本の貸し借り対応、寄付の受付等、図書室としての通常運営を行っていました。

利用者としては学生よりも市民の方が多く、徐々に固定の利用者が出来てきていました。本年度は、大学のサークル等とのコラボ企画などを通して学生との交流が増えたことにより、大学生の利用者も増えてきました。

また、図書室として本の貸し借り業務を行うだけでなく、利用者さんの要望も取り入れた「まちの拠点」としての運営にも努めてきました。利用者の中には、高齢者で“終活”のために所有していた本を整理したい、とのことで本の寄付を希望される方もいらっしゃいました。他にも、大学のサークルが作成する広報誌の掲示・配布や、市民団体やイベント等のポスター掲示、広告ビラの配布協力など、まちにある一つの情報拠点としても活動してきました。

以上の活動を通して、二つのことが分かってきました。

- ・大学生が「まちの拠点」を利用することで、市の中心部に出掛ける機会を創出できる。
- ・「まちの拠点」があることで、市民の方が地域活動をしている学生に要望を伝えやすくなり、情報が集積する。

一つ目の点は、以前から話が出ていた「学生が大学周辺に住んでいてまちの方に来ない」という課題を解決する一つ的手段として考えられます。拠点があることは、実際に学生が市の中心部に出掛ける機会を創出することに繋がりました。学生の利用者さんからは、「ここに来ることで初めて中心部の方に来ました。」という意見も聞かれています。

二つ目の点は、実際に利用者の方から聞かれた意見で「こういう場所があると、学生との会話の機会が持てる」とのお話をいただきました。市民の方にとっても、学生と交流を持ってみたいが、そういった場所も機会もなかなかない、というのが現状のようです。これを受け、要望を学生団体に伝えたり、サークル等が持ち込んだ情報誌や広報ビラを使って紹介をしたり、といった活動も行いました。市民と学生が交流を持つ機会の提供、集積した情報を適切な人へ届けることが、必要だと考えられます。

2. ワークショップの開催

日程 9月7日(水)

場所 つるまち図書室

本企画は、当図書室メンバーも2年生時に受講した「WS 演習」という講義の、本年度の受講生をつるまち図書室に招いて実施しました。

「WS 演習」講義について

- ・3日間の集中講義で、都市における自然を取り入れた環境デザインや、合意形成の方法を学びます。
- ・最後に成果物として、「自分たちがコミュニティを活用し、都留での暮らしをより豊かにするためのプロジェクト」を小班に分かれて企画します。

つるまち図書室も、この講義で生まれたプロジェクトが実現したものです。



受講生たちには、講義を受けて得た知識や経験を活かし「学生がまちと関わっていくこと」を考えてもらいました。都留で何ができるか、何がしたいのか、都留に欲しいもの、都留でやりたいこと、課題だと思うことに分け、学生目線から、都留のまちづくりについて意見をもらうことが出来ました。





このワークショップでは、二つの意見が多く見受けられました。

- ・自分たちが立案したプロジェクトや、他にもやってみたい地域活動はあるが、場所や予算がないために実現できない。
- ・市民と学生が情報共有できる場が必要。

実際に講義のプロジェクト立案段階を見学し、学生たちの意見を聞いていましたが、「情報が集まる場所」「気軽に立ち寄れる共有スペース」が必要だと考えている班が多く見受けられました。参加していた市民の方からも、「学生はいい意見を持っているので、実現できたらいいのに」という声が聞かれています。学生たちのハードルになっているのは、場所を借りる・改修するための金銭面や「どうすれば企画が成功するのか、誰に頼めばいいのか」といった情報不足、などの点が考えられます。学生に不足している企画成功のノウハウや専門家の人脈を確保するといった支援が、必要とされています。

また、上記のような地域活動に興味がある学生と、学生の力を必要としている市民の方を繋ぐ、「情報共有ができる場所」が必要だという意見も挙がりました。その一つの拠点としても、つるまち図書室は利用されています。しかし、当図書室だけではなく、市民と学生が交流できるワークショップや交流会を行える場が必要だと考えられます。

3. 地域イベントへの参加

「高尾神社例大祭 蚤の市」

日程 12月3日（土）昼の部

場所 高尾神社

本イベントへは前年度から参加しています。古本にて出店を行いました。本イベントへの参加する理由は2点あります。

- ・主催の方から地域で活動する文大生に出てほしいという要望をいただいたこと
- ・地域の方から「本の終活」を提案されたこと

地域を盛り上げるため一昨年からはまった蚤の市に図書室は学生として、しかしボランティアではなく、地域の人間として参加することができます。参加してほしいという要望にも応え、地域の方との交流を通し、文大生の活動のひとつを知ってもらう機会となりました。

2015年から図書室を開室していく中で、地域のお年寄りから「本の終活をしたいが寄付をさせてもらえないか」という声を何度か聞く機会がありました。そこには、「本の片づけをしたいが、売れる本ばかりでもないし、ここまでせっかく持っていた本を業者に二束三文で売ってしまうのはもったいない。読んでくれる人がいるならば寄付をしたい」という思いがありました。図書室は持ち主が他の人に薦めたい本や感動を共感したい本を貸し借りすることをコンセプトに始めたため、見境なく本を受け取ることは難しいと考えました。図書室のコンセプトを守りつつ、お年寄りの方々の要望に応じて片づけたい本を新たな読者へ繋ぐ方法として「蚤の市」に出店することを考えました。

「蚤の市」で出店し、新たな持ち主を探すことを前提に地域の方から寄付を募りました。

この活動を通じ、地域の方から文大生が声を伺うこと、そして対応することが可能であることがわかります。



- ・ 地域の声を聴くにはまず地域に出て活動し、知ってもらう必要がある
- ・ 声に対し、自分たちの地域活動の範囲でも応える機会がある

このことがわかりました。また、地域活動をする団体が増え多岐に渡るようになれば、様々な声に対し、対応できる活動を増えていくと考えられます。そのためには、文大生が地域に出やすい環境と、それらの活動をつなぐネットワーク、活動を広める広報が必要とされています。

4. 小説・漫画再現料理交流会

日時 12月10日(土)

場所 つるまち図書室

参加者 都留文科大学図書系サークルを中心に約15名

このイベントは図書室主催で、「本」に出てくるレシピの再現を作り交流しようという趣旨で行いました。目的は以下の3点です。

- ・ つるまち図書室と、都留文科大学の図書系サークルの交流を深めること。
 - ・ 大学の図書系サークルの企画をまちで行うひとつのきっかけとすること。
- 図書館サークル Libropass 主催でビブリオバトルを開催する。
- ・ 本を通して、読むこととは異なる繋がりをつくること。
- 小説や漫画のレシピの再現をすることで繋がりをつくる。
- ・ 都留のまちを利用すること。
- 食材を三町商店街の商店で揃える。

当日の様子

15:30~自己紹介等

初めて顔を合わせることもあり、自己紹介を行いレシピに合わせて3つのグループに分かれました。

16:00~買い出し→料理

18:00~食事

三町商店街内の八百屋やスーパーを回りながら食材を揃えました。お店の方にも声をかけていただき、様々なところで会話が生まれていました。学生側も必要な食材以外にも安いものを見つけたり、様々な場所を見て回ったりしました。中には個人的に買い物をする者もあり、普段利用しない三町商店街を参加学生には利用してもらおうことが出来ました。





その後は図書室に戻り、料理を行いました。今回は小説や漫画から3品を選び、再現に挑戦しました。

1. 夢みる親子丼(花のズボラ飯2巻)
2. バルサの食卓(精霊の守り人シリーズ)
3. おうち焼肉(きのう何食べた?10巻)

料理をするなかで「本」の話をしたり、活動について話したり、作り方を相談したりなど、自然と会話が生まれていました。

三町商店街を利用してみたの感想は「思っていたより安かった」という声が多く聞かれました。またお会計をおまけしてくれたことに身近さや普段の買い物との違いを感じたようでした。

大学から都留市駅のほうまで来る頻度を聞いたところ「ほとんどない」もしくは「バイトがこっちだからそのときだけ来る」という声がありました。普通に生活する分には大学周りで困らない、遊びに行くのは東京にという傾向がやはり見られました。わざわざ出かけるほどの何かはないという考えがあると感じました。



19:00～ ビブリオバトル



りました。

図書室の私たちも初めてビブリオバトルを観戦しました。読むのでもなく、読書会でもない「本」を通して「人」がわかる企画でとても盛り上がりました。地域の人を交えて開催することで、また新たな交流や発見があるのではないかと感じました。

これは図書館サークル Libropass が普段から行っている活動です。それを今回地域で開催する第1回としてつるまち図書室で行いました。今後、料理交流会やビブリオバトルを図書室を利用し、学生のみでなく地域の方も参加できるようにしていきたいと考えています。そのきっかけとして行いました。文大生の活動のひとつの出口としての図書室を利用できないかという当初の予定を実行したものになります。

今まで児童文化研究会の読み聞かせ等を地域に向けて企画してきましたが、参加者が集まらず、開催できないという問題がありました。そこで今回はこのような形で開催に至



ビブリオバトルとは？

ビブリオバトルは誰でも（小学生から大人まで）開催できる本の紹介コミュニケーションゲーム。

ルールは発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まり、順番に一人5分間で本を紹介する。それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

全体を通して

イベントの開催を通して、文大生が地域に出るための要素をいくつか発見できました。

- ・まちに出る理由があること
- ・活動ができる場所があること
- ・まちの人の人柄を知ること

まず、ひとつに「まちに出る理由」というのは、「野菜はこの八百屋で買いたい」、「お気に入りの喫茶店がある」というように、日常的にまちを利用する理由があるということです。現在、学生はまちを日常的に利用するほどの魅力を感じていません。そのような魅力を感じられる場所を創りだす、もしくは今あるものに魅力を感じるようになる必要があります。知ることができる機会を定期的に作ることが求められます。また学生は自ら魅力を創りだしたいと考えている場合もあります。

それが二つ目の「活動ができる場所があること」に繋がります。「場」を創りたいと考える学生はまず物件探しや、協力してくれる人を見つけることに壁を感じます。また、普段の活動をまちへと広げていきたいと考える学生にとってはそのような場がなかなか見つかりません。ホールや会議室等を借りるには金銭がかかります。10～30人ほどが集まって何かを出来る場所というのはなかなか見つかりません。今回のイベントでは、図書室から Libropass さんへと声をかけましたが、「やりたいと思っていたのでよかった」と言っただけでした。学生が「このような企画がやりたい」となったときに、活動場所を紹介できる窓口が市や大学にあることが求められるかと思えます。

最後は「まちの人の人柄を知る」ということです。現在学生は、ほとんどまちを利用しておらず、どんな人がどんなお店をやっているのかを知りません。しかし、今回のイベントでは、初めて会ったお店の方と会話がはずんだり、お店の方も「大学生が来てくれてにぎやかだ」と話してくれたりしました。学生にとっても地域の人にとっても「会話」をする機会があることが重要であることがわかりました。

以上が、今イベントを通して分かったこととなります。

5. 研修活動

日時：2017年2月12日

■西国図書室

場所：東京都西国分寺日吉まち

開室時間：毎週日曜（詳しくはFacebookに記載）

西国図書室は、私たちが図書室を始めるにあたり参考にした図書室です。今回また伺わせていただきました。



私たちが「本に囲まれて生活をしたい」というところから活動を始めたため、参考にしました。

利用者は自分の本を持ち寄り、自分が持ち寄った本と同じ数の本を借りることができます。持ってきた本は登録し、持ち主の名前、旅の期間、本との出会い、本のお薦めポイントなどを「本籍証」に記入して貸し出します。本を読んだ人は、持ち主へのコメントを「旅の記録」に書く。これらを基に本棚に並んだ本を選び、図書カードに記録してもらい借りていく仕組みになっています。

今回の訪問時にはお2人の利用者がいました。私たちが初めて会った方でしたが、様々な本の話で盛り上がり、本による繋がりを改めて実感しました。

篠原さん夫婦は「住み開き」という考え方を持っています。これは自宅というプライベートな空間の一部を開放し、友人や知人あるいは見知らぬ他人まで、さまざまな人が集う

この図書室を運営するのは、篠原靖弘さんと知花里華さん夫婦です。もともと本が好きで、それぞれ多くの本を所有していた。本は初めて出会う人をつなぐのにはいいツールとなり、「何らかの方法で家をまちに開きたい」と考えていたこともあり、人をつなぐ場になればと私設図書室を始めたといいます。



パブリックスペースとして共有することを言います。活動の継続には、住み開きの範囲で行うこと、ひとつの拠点に役割を持たせすぎず、もともとのコンセプトを保つことが重要だと、今回感じました。

■森の図書室

場所：東京都渋谷区円山まち

営業時間：昼 11：00～17：00 夜 18：00～24：00

森の図書室は本を読めて、借りることが出来る飲食店になっています。「読書を押しつけるのではなく、なんとなく手にとってみたくなるような空間」を目指している場所です。本を読む空間、場所の居心地の良さを担保するため会員制となっており、会員ではない場合には1回につき席料が500円かかります。本棚の並びはよくある出版社ごとや著者ごとといった並べ方ではなく、同じ著者のものがいろんな場所にあります。そのため、利用者を見ていると、本棚を見ながら店内を歩き、気になれば手にとってみるという過ごし方をしている人が多いように感じました。また、感想は誰もがいつでも書けるよう用紙が置かれており、本そのものに「本籍証」として貼ってある西国図書室とは異なり、店内の壁に掲示されています。

出されるメニューも本に出てくる料理や飲み物が中心となっています。コースターなども「本の感想文」になっています。

森の図書室では「本のある空間」、「読書のしやすい空間」、「本にとつきやすい空間」が常に守られていることを感じました。



*2 施設の見学を通して

2つの施設の見学を通し、コミュニティスペースを継続していくためのポイントがいくつかわかりました。

まずひとつには「活動を広げすぎず、住み開きとして行うこと」です。活動の幅を広げすぎることにより、手が回らない状況となることを防ぎ、特定の活動に継続性を持つこと

が重要だと感じました。特に文大生が地域で活動をするうえでは、講義等の合間を使ったり、時間のある長期休暇を利用したりする必要があります。活動を継続するためには、やることを学生自身の「やりたいこと」に絞る必要があります。

二つ目は「コンセプトを変えないこと」です。活動していくうちに変更した方がよい、こちらのほうがやりたいとなった場合には変えることに問題はありません。しかし、コンセプトを変えることで活動が浅くなってしまったり、義務感になってしまったりすることが考えられます。文大生が地域で行う活動は自主的なものであるため、自分たちが大切にしたいコンセプトをしっかり守る必要があると感じました。

提案書

■学生支援窓口の充実

つるまち図書室は、学生がまちで活動することを支援する仕組みの設置を提案します。現在、この役割を地域交流研究センターが担っています。本センターは、平成16年度に開設され、平成28年度4月にリニューアル、地域活動に関心のある学生に利用され、市民と学生を繋ぐセンターとして活動されています。学生の地域活動参加についての紹介や、地域教育や環境などに関わる公開講座、講演、フォーラムやイベントの参加・開催など、地域活動に関わる学生を応援し、学生や地域住民が協働できるような支援の体制があります。

学生も市民も気軽に利用できる施設として、今後さらにその機能を充実させていくために、「情報の集積」が必要になってくると考えられます。ワークショップに参加した学生からは「計画はあるけれど、どこに相談しに行けばいいのか」という意見が聞かれました。こういった学生が、「ここに行けば全部分かるから、相談に行こう」と気軽に行ける、ワンストップの支援・相談窓口が求められているように感じます。ワンストップの支援・相談窓口には、様々な情報をその場で開示できるように情報の集積が必要となります。地域住民や地域活動に関心のある学生の人材登録、イベントや講演会等の情報の集積・発信などを広めていき、学生が利用しやすい環境にある学内施設を、私たちのような学生に、有効に活用してほしいと考えています。

学生が地域活動を行う上でのポイントとしては、研修を通し、「活動を広げすぎない」、「コンセプトを大切にすること」ということが分かりました。また、課題としては、地域イベントを通し、まちへ出たい団体にその場所が見つけられないという問題が出てきました。

これらの解決策として、文大生が地域に出て活動し、それを地域への貢献に繋げるためには、様々なコンセプトの場が多く個所にできることが求められると思います。まちなかに拠点があくつもあり、それぞれが「本」、「スポーツ」、「カフェ」、「手芸」、「歌」などコンセプトを持つことにより、多種多様な地域での役割を果たしていくことができると考えます。また、場を持たない団体がまちでの活動を行う際に貸し出すことができる会場にもなりえます。

これを実現するには、活動する学生の他、物件を提供してくれる人、改修などに詳しく手伝ってくれる人、資金の援助、法律関係の相談にのってくれる人など様々な人が必要になります。しかしながら、地域に対してのネットワークが不十分な学生は、応援してくれる人を探すのにも困難が伴います。

よって、学生の活動の各ステップにおいて相談することができる窓口が運営されることが求められています。ここでは、物件や人材を紹介するだけでなく、地域活動を行う学生を登録し、それぞれの活動の経緯や資金、相談先、協力先などの情報を集積し、今後活動したい学生も活用できるネットワークを構築できると良いと考えます。現在の活動は全て

が独立しており、全体としての繋がりがありません。また、情報の共有も十分に行われていません。ワンストップの支援・相談窓口があることで、学生・地域の方を問わずそれぞれが行っている活動の情報集積・共有も行うことができると考えられます。

■まちづくりコンペの開催

地域での活性化活動を周知する、もしくは増加させるために以下の2つの「まちづくりコンペ」を提案します。

ひとつは、学生の活動を支援すると同時に地域の方に活動を知ってもらい参加してもらう機会を設けるものです。都留市でまちの活性化や地域再生を目的とした活動の企画を募集し、審査するコンペを行います。広報等でもプレゼンを行うことで活動をする前から知ってもらうものです。また、学生は物件の貸借・改修等の費用を持ち出しで行っている場合が多く、初期費用や維持費用は活動のネックな部分になっています。このため、コンペを行うことで、最優秀賞には補助が出る、協力してくれる企業がつくなどといった金銭的支援があれば、学生の活動のハードルが下がるのではないかと考えました。

もうひとつは、都留市民と学生とで企画を作成し、プレゼンするものです。まず市民や学生に関わりなく、最終目標を地域活性化活動企画の提案として、数度のワークショップを重ねます。そのなかで企画を具体化していき、最後にはプレゼンをしあうというものです。この活動は、学生からの目線と、地域住民からの目線を盛り込むことで、「都留だからこそできること・やりたいこと」の発見に繋がります。また、市民と学生の交流が生まれ、企画をともに練ることで市民と学生の協働を可能にすると考えました。

以上を、つるまち図書室からの提言とさせていただきます。